

一年間の精進を舞台で 素人のよさ味わって！



第55回 邦楽祭

平成21年11月23日（月・祝）、医家芸術祭「医家邦楽祭」は回を重ねて55を数えた。出演の諸先生方も医業に従事して数十年という大ベテランぞろい。多忙な合間に縫つて、舞踊に、長唄に、三味線にと精進、晴れ舞台で精いっぱい披露された。その模様を今回も邦楽評論家、宮西芳緒氏に紹介してもらつた。（上演順・一部編集上の都合で入れ替えました。写真説明は敬称略）

一、 舞囃子 「放下僧」 左端 沢田又一（太鼓）



開会あいさつ
太田怜委員長

評 宮 西 芳 緒

そうした先達を支えて活躍されている先生方も、すでに人生に確固とした立場を確立されていらっしゃる方々に違いない。こうした先生方が一年間、この日のために精進を重ねて舞台に臨まれる。観る者聴く者に勇気を与えてくださる舞台の数々である。今回はどんな曲を？ どんな趣向で？ と、大きな期待を胸に、開幕を待つ。

毎年、勤労感謝の日に日本橋三越劇場で開かれる日本医家芸術クラブ主催の邦樂の祭典。秋の芸術シーズンの掉尾を飾る風物詩として、すっかり定着した公演である。

連続して出演され「医家邦楽祭」の顔ともいえる、定運の先生方は、失礼ながら着実に高齢に達しているが、例年通り矍鑠とした舞台を努めていらっしゃる。

「開会のことば」は、日本医家芸術クラブ委員長の太田怜先生。過日、同劇場で開かれた清元宗家の演奏会を聴いて、玄人と素人の違いを痛感したと述べる。自分たちの会は素人の会ゆえ、「芸がない」分、個性ばかりで、その個性を楽しんで

今秋も
三越劇場で
(11月23日)

ください。逆に余裕のなさが素人の良さでもあり、お客様を酔わせるより自分が酔つているのも素人の良いところ」とアピールする。それゆえ「今日は”一生懸命””自己陶酔””個性”を楽しん欲しい」と重ねて語り、挨拶とする。

そうした微笑ましい舞台から玄人はだしの舞台まで、全十四番の番組が真摯に、整然と、和やかに上演された。

一、舞離子（観世流）『放下僧』

大鼓の沢田又一先生（横浜市、外科）をはじめ、小鼓・笛と地謡の方々が並び、シテは梅津淨子氏。横浜医師会の能楽愛好会のメンバーによる一幕で、この「邦樂祭」出演もすでに十年あまりとなり、今回も例年通り邦樂祭の開幕を飾る。

内容は、地元・横浜市内にある瀬戸神社の境内を舞台とする仇討ちの物語で、

旅芸人である”放下”に扮して曲舞を舞い、鞨鼓を打ち、歌を唄つて相手を油断させ、みごと親の敵を討つ兄弟。その鞨

鼓を打つて舞う芸づくりを抜き出した、緊張感を保つつも華やかな舞離子で、沢田先生の大鼓を中心に、呼吸の合った梅津氏の舞いが、・面白の花の都や」と、静かに花を添えた。

二、小唄『白雪』『夕焼け』

『明治一代女』『雪はしんしん』



二、小唄 ④ 川口歎子

⑤ 式田とし子
⑥ 宮田さた



三、謡曲『高砂』

佐藤明徳先生（宝生流）の謡、平野宏先生と近藤智雄先生の小鼓（大蔵流）に

現在は、「毎日の時間を大事にする生活」のその一つとして、「今までに録音してあるテープで小唄の三味線と唄を起こして、皆様にお稽古していただいています」という、咲村鈴音（こと川口歎子先生（江東区、看護科）の三味線による小唄四題。

『白菊』と『夕焼け』は、前年から稽古を始めたという式田とし子氏が唄う。

「春に膝を手術され、リハビ

リに頑張っての出演」という式田氏を暖かく見守るよう

な川口先生の糸が耳に残る。

『明治一代女』と『雪はしんしん』は、もうお馴染みとなつた宮田さた氏の唄。芝居気分を大事にしながら、端正な

演奏を聞かせる。

よる一番（いざれも練馬区、外科）で、
・高砂やこの浦舟に帆を上げて」と、周
知の寿ぎの曲の一節が、「調の小鼓」とし
つかりと通る声とで会場内に響いた。



↑ 三、謡曲「高砂」(左から) 平野 宏、佐藤明徳、近藤智雄



四、小唄『虫の音』『酒と女』
④ 小唄 ⑥ 加藤俊男
⑤ 鈴木聰明



前々幕と同じく川口敷子先生の三味線
による小唄四題で、しつとりとした『虫
の音』と、ちょっと浮かれてノリの良い
『酒と女』は、「大病を
克服して」という加藤
俊男氏の唄。川口先生
の糸は静かに、穏やか
に、情景を描き出す。
「舞台では稽古の八割
しか成果を出せません
が」という鈴木聰明氏
は、・あんまりじやぞ
え治兵衛どの」・愚
痴も涙も」「一年越し」
の口説きと、・君と寝
やうか五千石取ろうか、
何の五千石君と寝よ」と、粹な『實輪心中』

の二題を気分良さそうに唄い、川口先生
の糸は、あくまでも優しい。



数々」から「霞に紛れて失せにけり」まで、おおらかに舞う。

六、長唄『勝三郎連獅子』

大森寛子先生(文京区、施設役員)が、
吉住小三郎師ほかとの唄、吉住小茂太師
ほかの三味線で、親獅子が仔獅子を千尋

五、仕舞(喜多流)『羽衣』

鈴木浩之先生(練馬区、外科)のシテ
写真。「本日の羽衣は、どのように天空
に舞い戻っていくか、『覗ください』と、
その意気込みを伝えて、・東遊びの



六、長唄 「勝三郎連獅子」 大森湜子



七、舞踊（長唄）『七福神』

の谷底に蹴落として、自力で這い上がつて来た仔のみを育てるという故事を描く。・それ牡丹は百花の王にして」から、牡丹咲き乱れる桃源郷に親仔の獅子が舞い戯れる様を、深みのある声で優雅に表現。三味線ははつきりとした音色で唄を救け、格調を高めている。

山梨県立中央病院ならびに山梨厚生病院の名譽院長を勤めている花柳和之城こと飯田文良先生（笛吹市、外科＝写真）は、今回が十一回目の出演という。軽妙な曲に取り組んでためたく舞い、・ながきよの「七福神を踊り分け、・なみのりふねのおとのよきかな」と『宝船』を結んで、全篇機嫌良く、・拍子揃えて「一曲を踊り切る。一徹な雰囲気が緊張感を伴つて伝わって來た。



党『髪結新三』と、一命をとりとめてこちらのちには鬼飼の清吉

かつお』の売り声を聞く湯掃りの江戸前のかつお』の小糸ひ悪写真）は、今回も居小唄を題。・目に青葉、山ほどぎす初鰹、「かつお

と十六夜お小夜という二つ名前でゆすり場を演じる『十六夜清心』の・この世で添われぬ二人が悪縁の心中

十一、小唄『髪結新三』『十六夜清心』

山田新太郎先生（練馬区、整形外科＝

場を、柴小亜也師の三味線で唄う。山田先生はさぞ芝居がお好きなのだろうと、毎回、聴きながら思う。

八、長唄『二人椀久』

杵屋勝・に子こと山崎律子先生（台東区、皮膚科）は、日吉小間藏師ほかとの唄、杵屋勝国師ほかの三味線。囃子付。

山崎先生は声量もあり、しつかりとした真っ直ぐな声が心地良い。振やかな曲調から「転」・「ゆく水に」深い情感を持つて唄い、「もうし椀久さん」を受けて「ふられず帰る」たつぶりと唄い、劇場の空気を収斂して見せた実力。・拍子揃えてわざくれ』三味線と鳴物に渡して、じたい某は』から早間の楽しい件りも流されることなく落ち着いて唄い、勝国師はさすが、三味線の技巧で観客を魅了了、「さとさとは」から夢醒めに向かつて急転して行く予兆を的確に聞かせ、大きな拍手を集めて幕を切った。



↑ 八、長唄「二人椀久」

↓ 九、長唄「吾妻八景」



隅田川など、江戸の・八つの名所の情景を丁寧に描き出す。「まさか、この舞台で発表できるとは夢のよう」と語る秋葉先生は、千葉県女性医師部会の会長として活躍されている由。唄は杵屋秀子師ほか。ニューフェイスの登場が喜ばしい。

十、清元『落人』

今回もご一緒に語られる予定だった名コンビの菅又淳先生（大田区、精神科）が入院のため休演となり、太田怜先生（目黒区、循環器科）は急遽、両先生の師匠である清元延千宗師に出演を願い、おのの喉を聴かせる。清元延

九、長唄『吾妻八景』（写真上）

「邦樂祭」には今回が初参加とい

う秋葉則子先生（八千代市、内科）の三味線は、柏伊三郎師ほかと呼

吸もよく合って、日本橋・浅草寺、隅田川など、江戸の・八つの名所

の情景を丁寧に描き出す。「まさか、この舞台で発表できるとは夢のよう」と語る秋葉先生は、千葉県女性医師部会の会長として活躍されている由。唄は杵屋秀子師ほか。ニューフェイスの登場が喜ばしい。

志寿佳師ほかの三昧線。

道行のお軽と、お軽に横恋慕して・うぬが主人の……」

と勘平にからむ鶯坂伴内の二役を語り分けるのが今回の太

田先生のご趣向だが、『本人

は「よる年波で、初々しいお

軽が熟女風になつております

が、その点は『容赦のほどを』、

そして『幸か不幸か、今月の歌舞伎座は忠臣蔵の通しです。

昼の部の切がこの落人ですの

で、今回の私の落人に食傷された方は、どうか歌舞伎座の

方でお口直しのほどを』と、

アナウンスで伝えるのも『愛嬌』心を込めたお軽の一路と、

勘平、返事は丹頂丹頂』と鳥づくしの伴内のチャリまで機嫌よく聞かせた。



↑ 十、清元「落人」

↓ 十二、長唄 「三曲糸の調べ」



十一、長唄『三曲糸の調べ』

応え

「待つてました」の大向こうに、「待つていたとは有難い」と気の風よく

しかし可愛らしい芸者姿である。

十三、舞踊（清元）『お祭り』

「一度、芸者の格好がしてみたかったので」という尾上菊尚こと大川尚美先生（横浜市、小児科）が、師匠の子息・尾上菊方師の若い者を相手に踊る。とさかの前髪に大きな男鬚（「待つてました」の大向こうに、「待つていたとは有難い」と気の風よく）

も……」・影清く……と、杵屋正澄己こと高橋妙子先生（中央区、耳鼻咽喉科）、杵屋正園師ほかの三昧線唄は杵屋五功次師ほか。囃子付。箏・三昧線・胡弓の音色と技巧を（すべて三昧線で）聴かせてなお、遊女・阿古屋の風格と、そのところの清く澄んでいる様とを伝えなくてはならない至難の曲を、高橋先生は華やかに、丁寧に演奏する。実に聴き応えのある一幕となっていた。

粹な引くもの尽くしもどりか可憐に、樂しく見せていた。



↑ 十三、 舞踊（清元）「お祭り」

↓ 十二、 長唄 「勝三郎船弁慶」



十四、長唄『勝三郎船弁慶』

五十五回目となる医家邦楽祭の大切は、杵屋和重一・東音前村八重子こと前村八重子先生（東久留米市・小児科）が、杵屋栄敏郎師ほかとの三味線・東音福田克也師ほかの唄で、今回も大曲を披露する。囃子付。

「では熱演をお楽しみください」というアナウンスに応えるように、福田師の・今日思い立つ旅衣」と重厚な語り出しに始まり、義経との別れに鳥帽子を渡されて一さし舞う静御前の憂いを帶びた品格、間狂言を挟んでノチの知盛の盡の凄絶へと、前村先生の独壇場といえるスケールの大きな世界が描き出される。・そもそもこれは桓武天皇九代の後胤」……いかに義経」と、芸格を湛えた福田師の唄を受けて、変化に富んだ一曲を冴えやかにリードして盛り上げてゆく前村先生の年季の入った三味線。

毎年欠かさず聴かせてくれる、衰えを知らないエネルギー・シユなパワーもさることながら、・そのとき義経少しも騒がずからきつちりと舞台の枠に納める正しさが素晴らしい、また次回はどんな演奏を聴かせてくださるか、楽しみである。

「素人の芸でございますが、長年の成

果が発揮出来たと思います」と、「閉会のことば」は、新たに同クラブ邦楽部副委員長になられた川口歟子先生。



閉会あいさつ
川口歟子副部長

三味線の音色に魅せられ

再三の中斷を経て再開

初参加のことば 秋葉 則子

長い歴史のあるこの邦楽祭に参加でき大変感激しております。毎年、三越劇場へは足を運び、聞かせていただいておりました。

この度は主人の後押しがあつてエントリーしました。それには師匠のお許しがなければだめなことでして、思い切ってお話しをいたしました。入門してまだ3年目でした。快くやつてみたらと言われ、

またお唄の師匠方や三味線の師匠方にも出演依頼をしていただきました。感謝しております。一人ではどうしようもありませんから。

司会は高松真弓氏、進行は中島信子先生に代わって高橋妙子邦楽部部長。
今後、是非とも、少しずつでも若い先生方にこの意義深い公演に加わっていたい、第百回公演を目指してさらに盛り上げてゆかることを、客席からも希望したい。

参加を「希望の方は、事務局まで
ご連絡ください。

✿ 042・344・8056

小学6年生の頃に近所に長唄の師匠があり妹と二人でお稽古に通いました。中学3年で高校受験、その後も大学受験、国家試験で全くお稽古」とから遠ざかつ

ていました。30年ぐらいして開業という忙しい最中に急に三味線の音を懐かしく思い出し、患者さんの紹介でお稽古に通い出しました。5、6年ほど経ったとき師匠が亡くなり止めてしまいました。

三味線の音に魅せられて邦楽祭に出かけ、またやつてみたいと思うようになります。そして今の柏伊三郎師匠を紹介していただき、入門の許しを得てお稽古中です。舞台に出るということはお稽古の態度に変化がありました。毎回の稽古日には予習もし、帰つてから復習もし、真剣に取り組みました。良い刺激を受けました。

テープやビデオを見てまだ稽古の足りなさ、未熟さがはつきり映つていてはずかしい限りです。もし次回があるなら、もう少し上達している自分を見ていただかなければと反省しています。劇場にお出で下さった皆様に感謝申し上げ、また多くの関係者に有り難うございましたと伝えたいです。

秋葉則子先生



高橋妙子先生



前村八重子先生



出を待つ大川先生

舞台上をズームアップ

かねてから悩みのタネでした。A5判という紙幅、横一列にお囃子付きなどと並ばれてしまい、会員の先生が豆粒。そこでスポットを絞りました。



沢田又一先生



山崎律子先生



大森進子先生



太田 恵先生